

「場所形成 (place - making)」の思想と「カイロス」の時間 —都市の周辺世界鶴見・潮田の思想の水脈—

広田 康生

本稿の意図は、横浜鶴見・潮田に形成され、「水脈」として流れる「場所形成 (place-making)」の「思想」について考察することにある。周知のように鶴見・潮田は、近代日本を作りだした「京浜工業地帯」の中心地であり、現在の首都東京を下支えする「周辺」とされてきた。だが、トランスナショナリズム時代の展開は、中心の価値観や制度や思想を受け入れるだけではなく、時に定型的な「大きな物語」を否定し、時に「幾つかの物語」や「可能性」を提起する「思想」を生み出している（広田 2003；広田・藤原 2016）。言わば、鶴見・潮田のような「思想化される周辺の世界」の中にこそ、現在必要な「幾つもの可能性」や「思想」が生まれて来る。「都市の周辺世界」にこそ、我々自身の経験を改めて再考し、さまざまな異議申し立てや不協和的な声や固定化されたアイデンティティの裂け目を探し、これまでの都市コミュニティの新たな可能性が要請されてくる。

筆者は、鶴見・潮田が、これまでに「都市の周辺世界」として経験してきた「場所形成」の「思想」や「出来事・闘争」の歴史の中に、現在の「場所形成」や「生き方」の「水脈」を探してみたい。以下、まず初めに本稿の「問題の所在」について本稿の研究の目的と必要性について述べ、第二に本稿の「場所形成」と「思想」を明らかにする「視点と方法」について述べ、第三に、事例として鶴見・潮田の「思想」について明らかにし、最後に結語を述べる。

1. 問題の所在

「思想化される周辺世界」という概念は、グローバル化する中での通念的な「大きな物語」を脱中心化し、現在の「幾つもの在り方」や「幾つもの人々の生き方」や「自分自身を越える場所へと誘う可能性」（Bhabha 1994=2012：1-34）を構想し構築する「場所」となっている。周知のように、ここでの「思想化される周辺世界」という考え方は、中心化された制度や通念的な考え方を相対化し、脱構築する試みと呼び起こすための「世界」として使われた、本来は、文化人類学的の用語である（清水 1996）。

もちろんこうした考え方や動向は、都市社会学においても同じように提起されている。例えば、アメリカの都市社会学者 S.ズーキン（S. Zukin）は、画一的なグローバル化とは異なる、

「オーセンティックな都市をつくるのは、これらの物語、これらの建物、これらのストリートである」と述べている (Zukin, 2010=2013: 002)。ここで言う。ここでの「オーセンシティシティ」とは、都市やその地域の、歴史的なものと新しいものの二つの側面を繋げて、その「場所」の特徴を表わす。都市のアイデンティティあるいは一種の「生きる思想」と考えてもいいかもしれない (Zukin 2010=2013: 004)。S.ズーキンが事例としたのは、ニューヨーク・マンハッタンのイースト・ビレッジを始めとする、過去の「都市の周辺世界」で、移民とエスニシティと異質な諸文化と階層とそして彼らの「闘争」の「場所」に、言わば、「われわれを越えた場所へと誘う可能性」や「未来」が求められている。

わが国でも、日本の都市社会学者故奥田道大は、アメリカの都市社会学者でこれも同じようにマンハッタンのローア・イースト・サイドの研究をしたアブ・ルゴド (Abu-Lugodo 1994) を参考に、「思想化される周辺世界」のなかの「移動・エスニシティ」「サブカルチャー」「階層」「闘争」等々の諸側面の中に、「20世紀のシステムの総仕上げとしての世界都市とは一線を画した」、言わば現在及び将来のトランスナショナルリズム時代の都市——彼はそれを「錯綜体都市と呼んだ——の都市コミュニティの「思想」を見ようとした (奥田 2004: 165-211; 広田 2019: 59)。

筆者は、都市エスニシティ論からトランスナショナル・コミュニティ論への展開の中で、『場所形成 (place-making)』とアイデンティティの都市社会学』を提示し、都市エスニシティ論を含んだ都市コミュニティの中に、幾つもの可能な「歴史」と「思想」を掘り起こすことが重要であると考えた (広田 2003; 広田・藤原 2016; 広田 2019)。

「思想化される周辺世界」の研究は、以上のように、現在の都市社会学にとっては、重要な理論的かつ現実的テーマを提起している。「都市の周辺世界」の「思想」「思想化」を知るためにどのような研究をするかが、都市社会学の一つの現在の課題である。

2. 「都市の周辺世界」の「思想」を探る方法論と概念

2.1. 手掛かりとなる概念 (1) — 「自分自身を越える場所へと誘う可能性」と「場所形成」の概念

「都市の周辺世界」の「思想」「思想化」を探る手掛かりの一つ目として提起したいのは、「自分自身を越える場所へと誘う可能性」と「場所形成」という概念である。

「場所形成」という概念は、現実の制度が必ずしも整っていないなくても自らの「想像」や「思

想」を駆使して、自らの「場所」を形成する、言わば、「日常実践」や「実践の思想」を指す。例えば、アメリカの文化人類学グプタ (A. Gupta) とファーガソン (J. Ferguson) が主張し (Gupta and Ferguson, 2001 : 6)、その考え方をカリフォルニアでの日本人の移民社会を研究した K.レオナード (K. Leonard) は、異なる社会に移動した人々が「自分自身を越える場所」を構想し構築するために、「場所の意味付け」や「記憶の掘り起こし」や「記憶の想像の豊かな利用」を駆使し、「自分自身を超える場所の可能性」の過程研究した (Leonard 2001 : 118-136)。あるいは、R.ウエダ (R. Ueda) が、その論文である「初期トランスナショナリズム——戦間期におけるハワイの第二世代の日系アメリカ人」において、第二次世界大戦の時期に、日本からの繋がりを断ちながら、自らの記憶や想像を通して彼ら自身の商店街 (ア・アラ街) を作りだしたように (Ueda, 2002)、本稿で言う「場所形成 (place-making)」と言う概念は、言わば、「記憶」や「想像力」を動員し「日常的な実践」を通して、「幾つもの物語」を「構想」し「構築」するときの重要な方法である (広田・藤原 2016)。

2.2. 手掛かりとなる概念 (2) —対象とする「場所」「出来事・闘争」とカイロスの時間

「出来事・闘争」「移動」「場所形成」の「思想」を探す二つ目の概念として、「カイロスの時間」と言う概念を挙げておきたい。

「カイロスの時間」とは、もともとドイツの第一次大戦と第二次大戦の間の哲学者 P.ティリッヒ (P. Tillich) の概念である。彼によれば、言わば実存的な「時間」には、通常の時を通常に刻む時間 (クロノスの時間) とは異なって、「創造と運命とが一つであるような瞬間」で、「この充滿された瞬間、運命を、決断として我々に会う時間的経緯」を彼は「カイロスの時間」と名付けた (ティリッヒ 1979:464-467)。周辺世界が作り出し、時に「伏流的」に地中を流れたり出現したり、「自分自身を越える場所へと誘う可能性」を見つけるためには、この「カイロスの時間」という概念は参考になる。さらにティリッヒの研究者である鬼頭葉子氏によれば、「カイロスの時間」に加えて、ティリッヒによる「生」とは、「可能的存在の現実化」であり、それは「運動によって展開する」ものであり、そしてティリッヒの「生」とは、「三つの要素」すなわち、「自己同一」「自己変化」「自己への回帰」からなり、それぞれの「要素」は、「自己統一」「自己創造」「自己超越」という「機能」によって引き起こされる、と述べている。そこで、「生は、自らの中心性を保ちつつ、自己創造の機能によって新たな中心性を志向しつつ変化し、自己の中心を新たな確立をする」と言う (鬼頭 2018 : 56)。

筆者は、これらの概念を手掛かりに、「都市の周辺世界」の「場所形成」の「思想」「カイロ

スの時間」を探してみたい。

本稿で筆者は、日本の近代化の初期、「京浜工業地帯」の中心であった鶴見・潮田を「周辺世界の思想」として考える場所とする。筆者が「周辺世界」として鶴見・潮田と定めた理由は、それが「近代化を作りだした歴史の出発地」であったということのほか、都市社会学の都市コミュニティ論・都市エスニシティ論へと筆者を導いたのが、1990年代の初頭において、国境を越えて移動してきた日系ブラジル人が「拠点」とし、彼らの、異なる社会の中での「適応」や自らの「異質性認識」と「アイデンティティ」に、「自分自身を越える場所へと誘う可能性」を求め、彼らの行動や彼らの新たな「構想」や「構築」を与えた「場所」こそ鶴見・潮田であり、その場所に自らの生き方を刻んできた人々の「場所形成」と「思想」を探す場所である、と考えた。

本稿は歴史的社会的志向にある。この具体的な志向性のもとで、鶴見・潮田の「場所形成」と「思想」を探究する手掛かりとしての「対象」や「時間」や「出来事」として筆者は、一つに、大正から昭和の「戦間期」時代への時期に発生した「鶴見騒擾事件」という「出来事・闘争」を、そして、二つ目には、それとほぼ同じ「時期」における、沖縄出身者を中心とする「移動」と「場所形成」—彼らは言わば「エスニシティ」と「沖縄村（エスニック・コミュニティ）」—を、そして最後に三つ目として（本稿では「補足」でしかないが）、「煉瓦女工の町」「三業地」「カフェー」等の「社会的世界」に焦点をあわせる。

具体的な「出来事・闘争」、移動の人々の「差異」の「場所形成」の中に、鶴見・潮田の「階層変化」や「時代的变化」そして彼らの「生き方」や、「自分自身を越えた場所へと誘う可能性」の「思想」が見つかるのではないか。ちなみに、以上の「出来事・闘争」や「沖縄村」の展開は、1990年の「改正出入国管理法」によって日系ブラジル人たちが国境を越えて移動し、エスニック・ネットワークをつくりだした時、彼らの「思想」が掘り起こされ、その「水脈」が現われたと筆者は考えた。

ここまでをまとめると以下ようになる。「都市の周辺世界」の「思想」を探す手掛かりとして本稿では、「自分自身を越える場所へと誘う可能性」と「場所形成」の概念、そして「カイロスの時間」と「生」の展開を手掛かりに、大正から昭和初期の「鶴見騒擾事件」の「出来事・闘争」や、その時代を起点に鶴見・潮田に「移動」してきた沖縄出身者（本稿では朝鮮出身者にもわずかに触れるが）の「差異」の「場所形成」、そして今回の本稿では「補足」でしかないが、戦前・戦後の「煉瓦女工の町」や「三業地」や「カフェー」の「場所」にも触れ、鶴見・潮田の「場所形成」の「思想」を表わす「闘争」と「階層」や、「差異」の中での彼らの「場所形成」の「構想」と「構築」を考えることで、歴史の中に埋め込まれた「場所形成」の「思想」

の「水脈」を探してみたい。

3. 鶴見・潮田における「都市の周辺世界」の「思想」の「水脈」

3.1. 鶴見・潮田地区における「鶴見騒擾事件」と「場所形成」の「思想」

3.1.1. 京浜工業地帯の鶴見・潮田

—二人の「企業家 (entrepreneur)」の視線—

大正 14 年 (1925 年) 12 月 21 日に鶴見潮田で起きた「鶴見騒擾事件」という「出来事・闘争」の「歴史」そして「記憶」を考える前に、鶴見・潮田に「近代」を刻印した二人の「企業家」について述べなければならない。鶴見・潮田の「騒擾事件」はその上に発生した。

鶴見・潮田地区が京浜工業地帯の中心としたのは、浅野総一郎や白石元次郎らによってその地先海面の「埋立」が出发点であった。「埋立」は、大正 2 年 (1913 年) から始まり、その後、大正 6~10 年ごろまでに、浅野造船所、浅野製鉄所、旭硝子工場、そして日本ヒューム管株式会社、日本鋼管等の工場が建設され、川崎側に、日本電力、昭和肥料、そして「埋立」ではないが浅野セメント等々が建設された (服部 1967)。まさにそれは、歴史的、社会的には、「大正デモクラシー」の時代 (1912-1926) であった⁽¹⁾。

同じように重要な基盤施設としては、大正 13 年 (1924 年) に、浅野総一郎や白石元次郎等が中心となり、「鶴見臨港鉄道」の免許申請を取得し、「埋立」地に設立した上記工場群を繋ぎ、生産のための原料や製品を引き込み、そして労働者群の移動を可能にする鉄道を作ったことも重要である。それまで大正 9 年 (1920 年) には、すでに、「海岸電気軌道」(「京浜電気鉄道」=現在の「京浜急行」の子会社であった) が創立されており、「総持寺—富士電機会社」間、「大師—桜橋」間が竣工され、大正 14 年 (1924 年) にはそれぞれ「総持寺—富士電機」間、「浅野セメント—川崎大師」間、「富士電機—浅野セメント」間が開業していた (川崎市編、1997: 78-79)。だが、この「海岸電気鉄道」が「人の通勤輸送」に着目していたのに対して浅野総一郎らの「鶴見臨港鉄道」は、通勤輸送に加えて、「埋立」地の生産拠点を鉄道網に繋げ、貨物輸送の利便を求めたものである。「浜川崎」から「埋立地の工場群」を「鶴見駅」に繋げることで、京浜工業地域を完成させた。「鶴見臨港鉄道」は、鶴見・潮田一帯の労働者一般、建設のための土木建築関係者、請負業者、鳶・土工、移動労働者等々、急速に増加した潮田地区を囲むように運行され、鶴見・潮田が、京浜工業地帯の生産、物流と労働の中心的な「場所」として形成することになった (川崎市編 1997: 78-89、173-176; 渡邊 2011: 3-27)。もちろん、この時代

に、建設業界への「施主」や「請負業」、「下請」、「人夫出」、「鳶」や「土工」そしてこの業界に歴史的社会的な「立場」としての「稼業人」、「博徒」、「親分」、「旦那親分」そして、「テキヤ」、「自由労働者」、そして沖縄出資者や朝鮮出身者たち移動者、「三業地」、「カフェー」、「女工」たち等、この時代の鶴見・潮田には、「大正デモクラシー」を彩る人々が蝟集した⁽²⁾。

実際、これによって鶴見・潮田地区は、名実ともに京浜工業地区における「近代工業地」の「中心」として、新興地の「活気横溢」する場所になる。

ただし、地域社会的性格としては、鶴見川を境に海側の潮田地区と、鶴見駅や「総持寺」を含む鶴見地区とは必ずしも同じ性格とは言えない。歴史的に言えば、潮田地区への「視線」が「勃興する工場地帯」「労働の町」に向けられたとするなら鶴見地区側には、東海道の宿場の面影を残し、後に「騒擾事件」の出来事に関連する「会合場所」や「待合政治」の舞台にもなった「三業地」の料亭、待合、置屋なども含めて（鶴見駅と国道との間にそれはあった）、言わば工場地帯の潮田地区よりは「奥座敷」、そして「住宅地」の側面もあった。

鶴見地区は、浅野総一郎らによって潮田地先の「埋立」が開始された奇しくも同じ時期大正3年には平岡廣高によって、「総持寺」に隣接する「子育観音霊場 東福寺」の敷地に「児童本位を標ぼう」し、「西洋文化をうけいれ日本文化と融合させ、新しい文化を築く」日本で初めての「日本のテーマパーク」ともいえる「花月園」が着工された。平岡廣高は、唐津藩出身、新橋の「料亭 花月楼」の経営者で、そしてその妻・静子は、「大正デモクラシー」の象徴ともいえる、日本で初めて「ダンス・ホール」を始めた人物である（斎藤 2007：118-129）。

ただ、潮田地区と鶴見地区との「場所形成」への二つの「視線」が、片方は「京浜工業地帯」の形成、片方は「文化の場所」の形成というように異なるわけではなかった。平岡廣高の「花月園」もやはり「実業化として利益を視野に入れての目論見」であり、平岡の実際の内容も「別荘づくりが趣味の廣高にとって、向島に花月花壇を開設して以来、新橋の料亭花月楼の離れ座敷や貸別荘、ひいてはホテル経営を成功することが夢でもあり」（斎藤 2007：118）、浅野総一郎が、「大規模な海面埋め立て工事によってそこに広大な工業用地を造成しただけでなく、その用地を彼自身の多方面にわたる企業活動の舞台として活用」した「勇気に富む革新家」「実業家（企業家）」とするなら（服部 1967：33）、平岡においてのそれは、むしろ「リゾート・観光事業」に志向する「企業家の視線」であり、その分野は異なっている、鶴見・潮田地区の「場所形成」に関しては、同じ「企業家（entrepreneur）」としての「視線」であった。

実際、ここで上げた二人の「企業家」は、次の項で取り上げる大正14年12月に発生した「鶴見騒擾事件」に、浅野総一郎も平岡廣高も間接的には「縁」がある。後述する青山光二氏によれば、浅野が「川崎運河」の掘削の時にその建設を「請負」をさせたのが、後に大正5年に「建

築組合」として公認された「東京土木建築組合」の初代組合長の中野喜三郎（中野組）であり、この中野は、鶴見・潮田の「顔役」新井利喜蔵をとおして、「鶴見騒擾事件」での「清水組」の請負業としての「名義人」の「青山組」や、潮田の「土建業松尾組」として「助っ人」の役割を果たしている。そして、彼は、昭和 25 年には「松尾工務店」と改称後、「花月園」の経営を行い、昭和 34 年 6 月に、横浜のスラム対策で住民側から「初めて成文化された」といわれる「大岡川周辺不良住宅解消」に伴う、「住民」の「陳情書」に、「横浜ロータリークラブ」の一員として「発起人」の一人にもなった。（中田 1983：73-74）。

3.1.2. 「鶴見騒擾事件」に見る「闘争」と「場所形成」の「思想」

本稿で、「移動・エスニシティ」「出来事・闘争」「サブカルチャー」等々の、「都市の周辺世界」に埋め込まれた「場所形成」の「思想」を探す手掛かりとした「鶴見騒擾事件」とは、一般的には、大正 14 年（1925）12 月 21 日に、「東京電力会社」の火力発電所建設をめぐる潮田地区において発生した「下請土建業者」間の「なわばり争い」とされてきた「出来事」である。

故瀬田秀人氏によれば、昭和 50 年代になるまでは、この事件については『横浜市史稿』『横浜市史』『川崎市史』等にも記録されず⁽³⁾、当の「元請」であった現「清水建設」の「社史」からも「下請」だけの争い、とされていたが、「昭和 54 年、青山光二著『闘いの構図』（二巻）が新潮社から出版されることによって「事件の全体像がはっきりと浮かび上がり」（瀬田 1994：66-67）、それを昭和 56 年から 57 年にかけて、潮田の地元の自書店「こおろぎ堂」の「商店街のちらし」に、19 回に渡って「潮田散歩」として連載され、昭和 57 年に『区制施行五十周年記念 鶴見区史』（鶴見区史編集委員会 1982）で取り上げられ、同氏の著書『つるみ・潮田散歩』で改めて紹介され「記憶」として呼び起こされた（瀬田 1994）。

故瀬田秀人氏によれば、青山光二著『闘いの構図』（新潮社 1979 年版も朝日文庫版 1991 年も）は、「小説」の形をしているが、資料だけではなく関係者に関する 100 人を超える関係者にインタビューをし、完全にノンフィクションとして発表された。詳しく言うなら、青山浩二氏はそれを「ノンフィクション・ノベル」と呼んだが（瀬田 1994）、社会学的に言えば、エスノグラフィックな調査研究書でもある。故瀬田秀人氏によれば、朝日文庫（1991 年版）は、内容の一部を除いてはすべて「実名」で刊行された。青山光二の同書が刊行されてはじめて、この潮田における「出来事」が、京浜工業地区の歴史の中でも検討され「認知」された。例えば、研究論文としては、斎藤秀夫氏の「資料紹介 京浜工業地帯の形成と地域社会—いわゆる『鶴見騒擾事件』をめぐる』『横浜国立大学論叢』（第 40 巻、1994 年）があり、さらに、鶴見潮田の地元出身者で、「横浜 230 クラブ新聞社」（現在休刊）その他「地域出版事業」を行ってい

る佐藤誠氏（筆名サトウ・マコト氏）によって、「鶴見騒擾事件」の関係者の「騒擾事件」のその後の企業や（その家族・関係者の）近況の消息、インタビュー等がサトウ・マコト著『鶴見騒擾事件百科』（230クラブ、1999年）に掲載され刊行された。

筆者の本稿の目的は、「騒擾事件」の詳細な検討ではなく（その粗筋の詳しい説明は瀬田1994にあるので）、あくまでも、「周辺世界」における「場所形成」の「思想」を考えるためなので、特に、鶴見・潮田の「騒擾事件」の粗筋を簡単に追いながらも、政治経済学的にとりより、むしろ社会的あるいは時代的に、関係者の階層やその当時に生きた「移動・エスニシティ」特に沖縄出身者の生活の在り方、鶴見・潮田の人々の「場所形成」の「記憶」に触れることにある。したがって本稿では、粗筋については、唯一の「記録」とされている『神奈川県警察史』と青山光二氏の同書を中心に、その出来事の本質については故瀬田秀夫氏の著書、斎藤秀夫氏の研究論文を参考に、関係者のその後展開については、佐藤誠氏の『百科』などをまじえ、筆者のテーマについて述べることにする。

青山光二氏の場合においても『神奈川県警察史』においても、「鶴見騒擾事件」の登場人物が「実名」で記載されている箇所はもちろん「実名」で、無論、筆者が記す場合は敬称を付けて区別する。まず出来事の経緯から見ていこう。

『神奈川県警察史（上巻）』によれば、「鶴見騒擾事件」の「種別」は、「工事請負に関する勢力争いが原因で、土木請負業者がその配下の人夫、土工、博徒等を動員して一大争闘を展開した事件である」（神奈川県警察史編さん委員会（編）1970上巻：1096）。「日時」は、「大正14年12月21日、午後3時ごろから午後9時ごろまでの間」である（神奈川県警察史編さん委員会（編）1970上巻：1096）。同書同頁によれば「事件発生の場所」は、「神奈川県橘樹郡鶴見町潮田一帯」である。また同書同頁には、「事件関係者」（被疑者）として、「川崎側首謀者」として、「川崎市南町 土木請負業 三谷秀（みやひで：筆者）こと金井秀次郎 横浜市磯子区（及び）土木請負業 中田峰史郎」で、「鶴見側首謀者」として「橘樹郡鶴見町潮田 土木請負業 松尾組こと松尾嘉右衛門（及び）橘樹郡鶴見町潮田 土木請負業 青山組こと青山三代吉」とされている（ただし、青山光二氏によれば、三谷秀組と中田組との相手は、東京池袋の「青山組」の青山芳蔵氏＝「清水組」の「下請」で同社の「名義人」である「土木請負業」＝であり、潮田の事務所の青山三代吉氏はその代理である＝（青山1991上：11）。

『神奈川県警察史』（上巻）によれば、その「紛争」の「関係者」の「三谷秀こと金井秀次郎」は、川崎市議員堀内末次郎の子分で京浜間、鶴見、川崎方面において同業者間に強大な勢力をもち、「中田峰四郎は三谷秀の第一の子分といわれ、三谷秀事務所の事務を一切処理して実権を握り、親分をしのぐほどの実力者」であり、また、「三谷秀組に対し松尾組の社長松尾嘉右

衛門は、鶴見町所在の旭ガラス鶴見工場の職工を勤めていたが、その後博徒の仲間に入り、大正9年ごろ土木請負業をはじめ、「当時の松尾は鶴見方面においては中田峰四郎に次ぐ勢力」となっていたと述べ（神奈川県警察史編さん委員会（編） 1970 上巻：1097-1098）、そして「紛争の原因」として「中田、松尾、青山らは、それぞれの立場で土木請負業界における自己の勢力の扶殖に心を砕いていた。特に三谷秀を中心とする中田の勢力は大きく、他の請負業者に対して何彼と圧力をかけては事業を圧迫し、同業者からひどくうらまれていた」ことが「騒擾」の背景にあったとされている（神奈川県警察史編さん委員会（編） 1970 上巻：1098）。このように『神奈川県警察史』において「騒擾事件」の原因は、土木請負業者、博徒らの、勢力拡大と、恨みの問題とされていた。

だが青山光二氏は、『闘いの構図』の中で、この「騒擾事件」の「背景」として、「京浜地区の一大工業地帯としての急速な発展という」政治経済学的状況について述べ、大正七、八年前後の「この地域（＝鶴見・潮田）に続々と各種大工場が建設される「活気横溢」の機運」を指摘し、そこに「工事関係の輻輳がはげしくなるにつれ、しだいに業者同士の反目、競争、嫉視、暗闘が生じた」と指摘した（青山 1991 上：16）。故瀬田秀人氏も、青山光二氏に従って、「施主」の電力会社の競争の中で「東京電力」が、「鶴見潮田火力電力」（川崎市大川町）の建設を急ぎ、基礎工事で建築工事を平行して進め、さらに土建業者を一本に絞らず、「間組」に基礎工事を、「清水組」に建築工事をまかせ、両工事は、「間組」が「三谷秀組」を「下請」にし、「清水組」は「青山組」を「下請」とし（瀬田 1994：68）、博徒・土木請負業だけの単純な争いにはしないことに賛成した。

政治経済学的「背景」からこの「出来事・闘争」を見る横浜市立大の斎藤秀夫氏は、京浜工業地帯の「歴史的格規定」をした久保新一氏の研究（久保 1984）に沿いながら、この「鶴見騒擾事件」の時代を、「戦前（センイ工業主軸）段階」の第三期「戦時重化学工業化起点（昭和恐慌期）」という背景があったと述べている（斎藤 1989：94-95）。ちなみに「戦前（センイ工業主軸）段階」は、「軍工廠基軸期（開港、維新～日清・日露戦争期）」「民間重化学工業生成期（第一次大戦期）」「戦時重化学工業化起点（昭和恐慌期）」「戦時重化学工業化期（15年戦争期）」である（斎藤 1989：94-95）。

斎藤秀夫氏によれば、この時期は、言わば建設土木業の組織構造も変動し、この時期に、「資本主義形成期の大規模な公共事業は『請負人』という大企業の創立と、業界組織の結成をうながしていた」と指摘している（斎藤 1989：99）。実際、これまでの職人集団の系譜につながるような「東京土木建築組合」（初代組合長として中野喜三郎＝「騒擾事件」にも重要な役割を果たす）は活動していたが、「大正後期に入って、建築（建設）産業の「第二次産業革命」ともいえるべき、鉄筋コンクリート造が普及するにつれ、清水組のように、建設業から土木業にするも

のもあり、土木建築業から建設業への転換がはかられた」ことについて指摘し、この政治経済学的近代化に合わせて、「下請業」で働く「土木建設関連業者」の「鳶」「土工」「建設者」「無色・都市（雑業層）も、「博徒集団の性格を持つ渡世人」と「稼業人」にと分化した、と論じている（斎藤 1989：99-100）。たしかに、「鶴見・潮田」の「騒擾事件」を、建設業界内部の政治経済学的な近代化・構造変化に関連させて言うなら、「鶴見事件は、財閥として確立しつつあった『施主』、近代的『建設業』へ転換した『元請』、その下請業者が、それぞれの存在意義を京浜工業地帯形成にかけた、サバイバル」事件、ということになる（斎藤 1989：100＝傍点は筆者）。

ただ、本稿のテーマが、登場人物の「創造と運命が一つになる瞬間」に合わせ、「場所形成」そして「自分自身を越える場所へと誘う可能性」をどのように見つけ、どのように考えたのか、その「思想」を知ることにあるなら、もちろんその政治経済学的状況に加えて、「大正デモクラシー」の時、時代的、あるいは社会学的な「団体」「集団」「階層」「家族」「共同体」に関わる「因習的」的なあるいは「生き方の価値観」といった側面も重要になる。

青山光二氏によれば、「鶴見騒擾事件」の一方の「三谷秀組」と中田峰四郎氏（中田組）と闘争をした本来の「青山組」の主人公の青山芳蔵氏の場合、事務所を東京池袋に置き、「清水組」の「いわば元直属の下請親方」で、しかもいわゆる「清水組」の「名義人」で、無論伝統的な義理や人情の中に生きながらも、古い時代の「博徒」ではなく、「稼業人」としての「土木請負業」であったことを指摘している（青山 1991 上：42）。『神奈川県警察史』において、三谷秀・中田組と争ったとされている「松尾組」の松尾喜兵衛氏の場合は、青山光二氏によれば、「東京土木建築業」組合長の中野喜三郎の子分の荒井利喜蔵の土工であり、川崎運河の「掘削」をしているときに「目をかけられ」土建業をするが（青山 1991 上：148）、「博徒としての行状」が勝っていた、と小言を「親分」に言われていた、とも指摘している（青山 1991 上：148）。

青山光二氏によれば、さらに他方の「三谷秀組」金井秀次郎氏の本部は川崎であるが、その主軸の「中田組」中田峰四郎氏は横浜であり、そして、「元請」の「間組」の「下請」であるが、「松尾組」も、青山芳蔵氏の代理であった青山三代吉氏（潮田出身）も、闘争相手の「中田組」の中田峰四郎氏の間で、いわゆる「兄弟分」の関係にあったことも指摘している。ちなみに、青山光二氏によれば、松尾組・青山組に加担した荒井利喜蔵氏の場合は、もともと潮田の出身者であり（青山 1991 上：374）、同じく「松尾組」に加担した、潮田で「活動写真館 潮田館」を経営していた岩沢正蔵氏は「旦那親分」であると指摘している（青山 1991 上：373）。そして、中野喜三郎氏も、先述のように、浅野総一郎の浅野造船所の建設や川崎運河掘削のときの「請負」であり、結局は「青山組・松尾組」に加勢をしたのだが、「中野喜三郎にすれば、潮

田に関しては、自分の息のかかっている荒井利喜蔵氏や松尾嘉兵衛氏が陣地を構えている潮田という土地が、もとをただせば自分の縄張りだという意識も働いていた」と指摘している（青山 1991 上：378）。ちなみに荒井利喜蔵は、浅野総一郎の川崎運河の掘削の「下請」であった中野喜三郎氏の、そのまた「下請」という仕事上の繋がりだったが、自分の父親が鶴見・潮田を中心に「一人回船」として雑貨や食料品の商売を行い、母親は、潮田の「仲通り」で雑貨店を営んでおり、潮田と言う場所に強い繋がりがあったことを指摘している（青山 1991 上：376-379）。筆者はこういうところに「場所形成」の「生き方」が現われていると考える。

中田峰四郎氏は、「間組」の当時の代表者の小谷清氏とは、高知商業の先輩後輩の関係であり、「三谷秀組」への「助っ人」になった港湾関係荷役業者たちも、中田峰四郎氏が、横浜で「沖どまりの船舶に水を供給する会社」を経営した仕事上の縁及び仕事の関わりや義理でもあった（青山 1991 上：364）。なお、青山光二氏は、本の中で、鶴見地区に配置されている「三谷秀組」側には、当時の国家主義的政治団体「黒龍会」の「自由宿泊所」や芝浦の「労働自治会」などから集めて来た「自由労働者」たちもいた、と指摘している（青山 1991 上：277）。なお、「三谷秀組」の中田峰四郎氏も、政治団体に近いともいわれ、まさに時代が「大正デモクラシー」からまさに「戦間期時代」へと動いていた時代の瀬戸際に、この「鶴見騒擾事件」はあった。まさに彼らの「場所形成」あるいは「自分自身を越える場所へと誘う可能性」も、まさに「創造と運命が一つになる瞬間」を待っていた、と筆者は感じられる。

闘いの「勝ち負け」自体については、「三谷秀組・中田組」には横浜の港湾労働者（請負業）が加勢し、数の上からすれば、川崎市と横浜に本部を持ち潮田に事務所を持っていた「三谷秀組・中田組」が、圧倒的に有利であったはずだったが、東京に本部（青山組）と潮田に支部を持った「青山組」にも「大阪側からは「淡熊（だんくま）会」（博徒集団）が加勢し、「三谷秀組・中田組」の「埋立」の近くの「本町通り」にあった「事務所」を破壊し、「青山組」が一応勝利した。どちらも、日本刀、ピストル、モーゼル小銃、大砲（青山組側）などを打ち合い、検挙したものだけでも、「青山組」側は343名、「三谷秀・中田組」側は112名であった（どちらも、潮田に地理に多い人がおおかたのため、多くは逃げたので、本当の数はわからないといわれている）。

「鶴見騒擾事件」について、潮田の人々はこの「出来事・闘争」をどのような「場所形成」の「記憶」としたのか。もちろん潮田のなかでの「騒擾事件」であるから、町の全体がこの「出来事・闘争」に関わっている。「出来事」の場所は、鶴見駅から鶴見川に向かって「国道」を越え、「鶴見橋」を渡るとまっすぐに「埋立工場地帯」に向かう「本町通り」と、左に鶴見川に沿っていく「潮田通り」に分かれ、「本町通り」から「埋立工場群」に向かって歩くと左側に「仲通

り」とぶつかる。この時代、「潮田銀座」「仲通り」「本町通り」にはそれぞれ商店が多く、「仲通り」の川崎側に近い現在通称「ゴム通り」に近いほうの「仲通り」には「青山組」と「松尾組」が本部を置き、当時の「仲通り」は一番の「繁華街」で、「活動写真 潮田館」、そして「仲通り」には沖縄出身者たちや朝鮮出身者たちの「十軒長屋」が集まる（＝3・2 で後述するが、1990年代に「越境 - 移動」した日系ブラジルの人々も仮の住処にした時期もあった：筆者）。そして、「潮田」の町と「埋立工場地帯」とを分ける「電車通り」（現在の「産業通り」）から「本町通り」に入るところの近くに、「三谷秀組」の潮田事務所、中田善一郎事務所、寄席「末広」、伊吹屋酒店（「三谷秀組」の幹部が経営しており、「三谷秀組」の「睦会」の幹部）、そして、裏通りの「カフェー」などの店も、闘争の日は関係した、と言う（青山 1991上：276）。

決着が終るとそれまでは商店への「賦金」が厳しかった「三谷秀組」に対して、「青山組」と「松尾組」への賛辞も多かったといわれている（青山 1991下：97-98）。

「鶴見騒擾事件」への紹介者で町の住人だった故瀬田秀人氏の「感想」として次の言葉もある。「潮田は新開地であり建設労働者でできあがっている特殊な町であった」という引用をしつつ、その「町の体質とその変化は、地元の今後の課題として探っていく必要がある」と述べ（瀬田 1994：68）、『区制施行 50 周年記念 鶴見区史』の「第四章 第工業地域への変ぼう」の「第十節 鶴見区と近現代文学」の中で、「十五年戦争の進行によって京浜工業地帯は日本の兵器庫と化し、潮田一帯は、労働者があふれてますます雑然となったが、ここで労働運動や左翼文化運動弾圧のしわよせともいえる文化的現象が生じた」と述べ、「工業地帯独特の雰囲気に含まれた潮田に対して、『川向こう』という軽蔑の言葉が投げかけられたが、こうした土壌から生まれた文学的代表作品が、野沢富美子の『煉瓦女工』であった」等と述べ、昭和十年代のプロレタリア作家の作品群を紹介し、さらに「この区画整理（昭和 21 年～36 年ぐらいまで）によってスラム外の姿が消えて、大正初年から時代の波にもまれ続けて、休まることのなかった『煉瓦女工』の街は一応の落ち着きをとれどもどすことになった」と印象を述べている（鶴見区史編集委員会 1982：630-640）。

ちなみに、佐藤誠氏（サトウ・マコト氏）の『鶴見騒擾事件百科』の最後には、この出来事の関係者たちのその後の「生き方」について、自らのインタビューも含めて記している（サトウ 1999：230-261）。それによれば、一方の「間組」は、現「ハザマ」として、また「清水組」は、現「清水建設」として建設業界の中心的なリーダー的企業として活動をしているが、当時の「間組」の中心的「下請」の「中田組」の中田峰四郎氏は、その後、横浜港での「水供給社」から手を引き、「東芝」や群馬の「中島飛行機」などへの「人夫供給」をしていたが、その後、「中田運輸」として京浜地区における重要な運送業社となる。その辺については、「戦間期」時代から「ファシズム」時代に寄せた行動をとったという見方もある。また、もう一方の主人公

「清水組」の「下請」の「青山組」の青山芳蔵氏は、「騒擾」に関連した人々への責任を済ませから会社を「幹部・代人」にそれぞれ分割し、独立採算制とし、本人は隠遁した。しかし、その「青山組」は、それぞれ潮田で「青山工業株式会社」及び「喫茶 青山」を開き、川崎には「青山運送株式会社」を設立したという。出来事の中で、「青山組」を「助っ人」として縦横に活躍した「松尾組」の松尾嘉兵衛氏は、「株式会社 松尾工務店」を、鶴見地区に置き、一時貴族議員を務めていたが、その後、戦後、「花月園」の経営に乗り出し、「大岡川周辺」問題も含め、業界の重要な人物となったという（サトウ 1999：230-261）。筆者には、「闘争」に関してそれぞれがその後「自分自身を超える場所」に向ったと考える。

鶴見特に潮田の「場所形成」—「自分自身を超える場所へと誘う可能性」を自らの「運命や創造が一つであるような瞬間」に賭ける彼らの実践の在り方—という点で見た時、政治経済学的構造の変動や古くからの因習や伝統的繋がり、時代としての「大正デモクラシー」や「戦間期」の背景の中で、自らの「それぞれの運命」（あるいは時代）と「創造」を、特別な「時間」に個人を賭けたことに筆者は関心を持つ。それぞれに「乗り越えよう」とした「生き方」を潮田の「闘争の思想」の原点として「水脈」の一つとして残したと、筆者は考えている。

こうした「運命」と「創造」の「実存の時間」を自らの「場所形成」に賭け、それなりに「乗り越える」「思想」は、次元は異なるが、「自分自身を超える場所へと誘う可能性」を、「差異」の「場所」に賭けた鶴見・潮田に、国境を越えて「移動」した「沖縄出身者」（そして本稿ではあまり述べることはできないが同じ移動の朝鮮出身者にも）あると考える。それは、彼らの「子孫」として1990年代に「移動労働者」として呼ばれた「日系南米人」たちの生き方と共通する部分があると感じる。次に本稿では、その移動者たちの「場所形成」の問題に移ろう。

3.2 沖縄出身者たちを中心とする「移動者」の「場所形成」と鶴見・潮田のもう一つの「思想」 —トランスナショナリズムの「原点」と「水脈」

ここまで筆者は、大正、昭和の「京浜工業地帯」を出現させた鶴見・潮田での「鶴見騒擾事件」（大正14年）に見えてくる「闘争」と「思想」を、「場所形成」という角度から見て来た。彼らの「都市の周辺世界の思想」として筆者は、それぞれの「階層」が、その自分自身の「運命」と「創造」を、一つの屹立する「時間」として、自分を賭ける「生き方」を、この地域での自分で創造した「思想」として筆者は考える。

だが、「周辺世界」としての鶴見・潮田は、朝鮮出身者たちと沖縄出身者たちの、国境を越え

て「移動」し定住した「民族・エスニシティ」「異質な文化」の「磁場」と「差異」の「場所形成」の拠点でもあった。特に、朝鮮出身者の場合、本稿で「場所形成」の「思想」を考えるための「騒擾事件」の『闘争』中にも、大正12年の関東大震災時の朝鮮人については若干だが触れられていた。だが、鶴見・潮田に「移動」し「出稼ぎ」として住み、それを現在の「移動」の「エスニック・コミュニティ」へと繋げた「鶴見・潮田の都市の周辺世界」としての「水脈」を考えると、「差異」と「異質な文化」の主体である「リトル・オキナワ」へと変貌した「沖縄（琉球）出身者」の「場所形成」の「生き方」については、詳しい紹介があまりない⁽⁴⁾。

沖縄出身者たちの「場所形成」に入る前に、鶴見・潮田の当時の朝鮮人出身者たちについて関連する限りで述べてから、沖縄出身者の話に入ることにしたい。

昭和10年（1935年）10月に横浜市社会課が実施した『朝鮮人生活状態調査』には、横浜市全市310カ町の中で170カ町に「朝鮮集住地」があり、特に鶴見区には19カ町のうち12カ町の「朝鮮集住地」がみられたという。また「当時（横浜）市内に在住した朝鮮人の総人口は5,916名」で、中区の2,683名に次いで鶴見が多く、1,416名（男873名、女543名）、297世帯があり、その内、潮田には812名（男423名、女289名）、170世帯が住んでいるという調査結果がある（横浜市社会課 1935：3-13 夫 2005：19）。

なお、後述するが沖縄出身者が鶴見・潮田に移動する原因がいわゆる「ソテツ地獄」が象徴するなら、朝鮮人出身者の場合は、背後に、「日本の植民地支配の強化による土地収奪」に加え、やはり、京浜工業地帯の生成の工場建設、川崎運河浚渫その他臨時日雇労働を求めた（朴 1999：83-85；夫 2005：19）。

2005年度の慶應大学大学院政策・メディア研究科の修士論文を作成した夫徳柱氏によれば、朝鮮人出身者の居住地にとっても、後述の沖縄出身者たちの居住地と同様、潮田の「本町通り」「潮田通り」「仲通り」周辺に住んでいた、と想定していた。筆者も同様であるが、夫徳柱氏の、沖縄県人会元会長への当時のインタビューの中で、彼らも沖縄出身者とも、いわば「共存」していたのではないかと、とのインタビュー結果を述べている。鶴見・潮田における、関東大震災の時の朝鮮人問題については、「時の大川常吉鶴見警察署長が身をもって騒乱を阻止し、霞丸という汽船を鶴見川に回航させ、数役人を神戸に向けて出港させ、第二次世界大戦後、独立した朝鮮政府から感謝の意を込めて記念碑が贈られ、潮田の東漸寺に建てられています」と、町の「記憶」として受け継がれていることも確かである（細谷 2006：13）。

ただし、潮田で沖縄出身者たちと朝鮮出身者たちが、まったく「共存」していたわけではないと筆者は考える。『横浜貿易新報』（現在の神奈川新聞社）の対象14年（1925年）10月19日の新聞には、「潮田のそば屋で琉球、朝鮮人の乱闘 負傷者多数あり」との記事があるが、後述

するが、その場所は沖縄出身者たちの当時の象徴的な「沢田住宅」であり、そして、それは珍しいことではなかった、と筆者は考える⁽⁵⁾。さらにまた、労働問題も多く、『横浜貿易新報』には、川崎の「富士紡績会社」での、沖縄出身者の女工の脱走や自殺等についても決して少ない事件ではなかった。

3.2.1. 沖縄出身者の「場所形成」過程と潮田におけるもう一つの「水脈」

本節においては、横浜・鶴見沖縄県人会編『横浜・鶴見沖縄県人史：鶴見沖縄県人会百年の歩み』（230クラブ、2016年刊）＝以下では『百年の歩み』と略する＝と、吉岡福雄著『われらが砦 横浜市鶴見沖縄県人会』（そうぶん社、1988年刊）を中心に、彼らの「場所形成」の「都市の周辺世界の思想」について、まとめてみたい。

本稿では、「鶴見・潮田」における沖縄出身者の「移動」と「場所形成」の歴史について注目したい。一般的に、沖縄出身者たちの潮田への「移住」の出発点については、『沖縄県史』（第7巻・移民、1974年）の記述に基づいて推測されているようである。要約すれば、沖縄からのハワイへの移民が明治32年（1899年）であったこと、そして、移民の出航直前の伝染病やトラホーム等の検査や日本語能力の試験に落ちた人々の中から、潮田に住み着いた人もいるのではないかと、ということである（横浜・鶴見沖縄県人会編 2016：19-20；北川 1989：14）。

もちろん、こうした記述には、確信はない。『百年の歩み』を刊行し、鶴見沖縄県人会の会長を務め、本書作成のために資料を収集し（＝初めの資料は事情で紛失した）、様々な「古老」の方々へのインタビューを集めていた大城康彦氏によれば、最も古い資料としては、大正6年（7月10日）に「労務者が浅野組（鶴見地区）の生麦地先の海岸の埋立工事をしていた時、人夫がお盆の帰郷のため金を前借するということあり・・・浅野組の仕事（事務員）をしていた故細野一郎氏が所持していた人足台帳には、タラー、ジラー、カマー、カナーと言う名前があり、細野氏によると「沖縄本島の人ではなくて離島の人ではないか、たぶん生麦か子安の職人小屋に住んでいたと思うが定かではない」と記述している（横浜・鶴見沖縄県人会編 2016：20）。「大正7年（1918年）に始まった丹那トンネルの工事に沖縄出身者がいて、工事人夫の募集に当時向井町に住んでいた松田さん（＝「人夫出」の仕事をしていた人と推測できる：筆者）を訪ねてきたというが、その氏名はさだかではない。さらに鶴見の埋立工事に、県出身者20～30名が来たというが、その氏名も不詳である」と大城氏は記述している（横浜・鶴見沖縄県人会編 2016：20）。大正2年に始まった潮田先の「埋立」の一段落した大正6～10年ぐらいまでの間に、浅野造船、旭硝子工場、日本鋼管製鉄所、川崎富士瓦斯紡績工場が設立され、沖縄では大正9年の砂糖価格の暴落等も相まって、この時代ごろが、沖縄出身者の「鶴見・潮田」への「移動」が多くなった、というところが事実であろう。本書の同じ頁に、大正12年の関東大

震災で、上記の川崎富士瓦斯紡績で、死者 154 人の「女工」の内、46 名の沖縄からの「女工」が死亡している。『百年の歩み』の 21 頁に、「古老談」としてだが、「大正 12、13 年頃、県人の労働人口は、女性を除いて潮田地区が 3,650 名ほど」と言う言葉を載せている。本書の 26 頁には、本書の『百年の歩み』の執筆・編集の一人であるサトウ・マコト氏と重田忠氏の「執筆名」で『沖縄近代史事典』（県史別巻）からの引用糾としながら、「大正 14 年のデータ（沖縄県警察保安課）で見ると、大阪 8,533 名、神奈川県 2,846 人……」とあるが、筆者は、3,650 名を信用ができる。現在の移動労働者の数字についても、届をしないうまま、流入や転出があるのは、しばしばあるので、むしろ、現地に住む人々の感覚を信じるほうが正しいこともある。少なくとも、潮田への沖縄出身者の移動は、大正 9 年、10 年頃を境に急速に増加したと考えていいかもしれない。

ちなみに『百年の歩み』の 21 頁には、岸本久六氏のインタビューが掲載されているが、岸本氏は、大正 13 年 10 月 1 日に「日本製粉に勤めていた従兄を頼って横浜に来るが」すでに日本製粉には同じ「屋部」集落出身の人がすでに 10 名ほど仕事をしており、結局、「日本石油」が職工を募集していたので、ここで働くことになったという。関東大震災の後であったので、「仕事は資材の整備」「錆落としやペンキ塗り」などの仕事であった」とある。昭和元年（1926 年）には沖縄県人屋部同志会が結成され、「昭和 2 年（1927 年）沖縄県人屋部同志会は会員 100 名以上」あり、「初代会長には日日新聞社に勤めていた新城朝功氏が」就任し、「昭和 3 年には現在の入船小学校のところに土地を借りて、平屋で 25 坪の事務所を作った」、「その頃の沖縄県人の生活ぶりはというと、端的に言えば、シナ人、朝鮮人、琉球人というコトバに代表される差別もあり、特に朝鮮人に対する差別はひどく、人間らしい生活からはほど遠かった」と、書かれている（横浜・鶴見沖縄県人会編 2016：21-22）。

なお、このインタビューが実施された日時は明示されていないが、インタビュー実施の場所が、潮田の向井町の「松田団助」氏宅であり、この松田氏は、大正 6 年 4 月に従兄の松田一郎氏を頼ってきた人で、本書『百年の歩み』の 20 頁目に、「仕事は埋め立て工事の人夫」とあり、大正 7 年に向井町に住んでいた「松田」さんのところに、「工事人夫の募集に」訪ねて来た人がいたことが書いてあるので（同書 20 頁目）、後に述べる潮田における沖縄出身者の「社会的な繋がり」と互いの扶助的人間関係（＝「モアイ・模合）的關係と呼んでよいなら）によって作られ、すでにこの時期（大正 6、7 年頃）にはもはや、彼ら自身の「人夫出」が作られていたことが予測される〔注〕：前出の「鶴見騒擾事件」においては、詳細な資料にも沖縄出身者の人々の「人夫出」の件は載っていない。もちろん、後記する『われらが砦』の著者吉岡福雄氏は、昭和 10 年に本人が潮田に来た時、「宮（三谷）秀組」の「人夫出の請負」の下で「人夫出」をやっていた沖縄出身者に世話になると掲載されているので、前述の「騒擾事件」の「闘争」に

も参加したと思われる⁽⁶⁾

潮田に移動してきた沖縄出身者たちの繋がりや共同体の形成は、『百年の歩み』を読めば、地縁、血縁との強い紐帯と「社会的組織」が強かったと言われている。同書の23頁には「出稼ぎ地において、親睦を重ねた経済的基盤を構成する模合（モアイ＝頼母子講）を行い、県人会や市町村人会、字（あざ：筆者）人会を結成し相互に助け合うなど、その団結力は極めて強く働いた」（横浜・鶴見沖縄県人会編 2016：23）。北川泰三氏によれば、鶴見の場合、村単位の集団は、大正当時「島んちゅ会」と呼ばれ、大正末の「屋部同志会」（屋部出身者の島んちゅ会）、昭和3年ごろに、「伊江村人会」が形成。その間昭和2年には、「鶴見沖縄県人同志会」が結成されたという（北川 1989：18）。北川氏によれば、「沖縄県人同志会のリーダーの中には、鶴見で成功した「人夫出」が多く含まれており・・・角力大会の運営費は寄付によって賄っていた」と指摘している（北川 1989：18）。その後、昭和20年に「沖縄人連盟」が形成された翌年昭和21年には「沖縄人連盟鶴見支部」が結成される（北川 1989：19）、昭和21年には、「本部・今帰仁郷友会」が形成され、「宮古同志会」も形成され、沖縄出身者の繋がり、家族同士の繋がり、始まり、県人会や市町村人会、字人会同士の繋がり、それぞれが、「モアイ」の関係で、つながっていた。最終的には、昭和50年に「伊江村人会」の再組織を土台に、昭和には、「鶴見沖縄県人会」が形成され、現在の「沖縄県人会沖鶴青少年育成会館」（昭和53年）へとつながっていく（北川 1989：20）。

国境を越えて移動する現在のトランスナショナル・コミュニティ論、エスニック・コミュニティ論の経験からすれば、多くの「移民・エスニシティ」の場合、同じように初めは人々の「先住者」とのコミュニカルな関係をとおして、仕事や学校、生活関連施設、「宗教」「新聞」「娯楽」等の施設が作られ、次第に「エスニック・コミュニティ」が作られる。

潮田における「沖縄からの移動者」たちの「場所形成」も、同じであると考えられる。『百年の歩み』においても引用されている、吉岡福雄著『われらが砦 横浜市鶴見区沖縄県人会』（そうぶん社、1988年）は、昭和9年に潮田に移動し、戦前、戦後をとおして、自らの歩んだ「記録」を「日記」の形で本にした貴重な資料である。本人の著者を「吉岡」としているが、本人は、『百年の歩み』のなかで、「鶴見沖縄県人会」の重要な人物である。彼の「記録」をとおして、彼らの「場所形成」が補足できる。

『百年の歩み』のなかでも、大正6、7年ごろにはすでに、沖縄出身者の「先住者」が存在し、仕事の世話をしていたことや、「松田一郎」氏や「松田団助兄弟」などが、潮田の向井町に住んでいたことが記録されている。大正12、13年ぐらいには、『百年の歩み』に記録されている「岸本久六氏」などもそうである。

本格的な「人夫出」の「差配」は、吉岡氏の『われらが砦』には、「吉岡」氏が潮田に来た昭和9年には、「一年後（昭和9年）単身の上京に友人の根路銘君から紹介され尋ねた人は、鶴見区寛政町に住む県人の有力者大城安栄氏であった。宮秀組の印半纏を来た偉丈夫な親分姿に圧倒され尻込みをしながら迎えられた後、沢田住宅の津堅氏を紹介されて、その人夫出しの下宿屋新門方に逗留し、翌日からの出勤だった」とある（吉岡 1988：9）。この時期にはすでに、「人夫出」の「親方」が、その上の「人夫出」の下で働いていたことが想像できる。「吉岡」氏の文章の中には、続いて、次のように文章がある。「大勢の若者を抱える鶴見の親分と呼ばれるひと、・・・羽田呉我出身の宮城雄三である。当時彼37歳の親方で、浅野製鉄所の請負業者宮本組の配下で宮城組の看板をかかげ、・・・世話をしていた」とある（吉岡 1988：16）。

また吉岡氏によれば、彼らの商売としては、酒屋商いが多かった。吉岡氏『われらが砦』のなかには、「酒屋を経営し、高山酒店（本部）、渡具知酒店（名護）、津堅酒店（朱里）、崎山酒店（名護）、銘苅酒店（伊是名）、伊礼酒店（伊是名）、森岡酒店（朱里）、下地酒店（都）等がある」と指摘されている（吉岡 1988：18）。

彼らの多くは、潮田の「仲通り」から現産業通りのまでの間の、いわゆる浜町に集中して暮らしていたといわれ（横浜・鶴見沖縄県人会編 2016：48）、その中心的象徴が、「沢田住宅」であった（もっとも、この沢田住宅は、昭和20年の空襲で焼け落ちた）。なお、戦後しばらくの間、この「沢田住宅の焼け跡に、沖縄芝居の常設小屋（沖縄振興劇場）があったといわれている（横浜・鶴見沖縄県人会 2016：49）。

ちなみに、沖縄出身者の共同体の場所は、多くは、「エスニック・コミュニティ」そのものと言われる。次の吉岡氏のその文章は、それそのものである。「当時の世相からして大和人、沖縄人、朝鮮人という差別の中の悲哀の中に幼児達までが辛吟していたころである。鶴見区に県人が所在しているところは、潮田町に集結して、なかでも沢田住宅という十軒長屋を独占していた・・・ここ鶴見のウチナー部落と言われる所以かもしれぬ。島国沖縄を出て初めてきた大和の国、どうしても友人知人をたよりに尋ねておちつく格好の場所だったに違いなかった」（吉岡 1988：10-11）。

3.2.2. 沖縄移動者たちの「越境-エスニシティ」と鶴見・潮田の「水脈」

大正6、7年ごろから潮田に本格的に「移動」を増やしてきた沖縄出身者は、すでに、現在の入船小学校のあたりの「仲通り」3丁目から現在の汐入小学校のあたりまで、そして「仲通り」から現在の現産業通りに挟まれた「浜町」あたりに、「沢田住宅」を象徴に「移動者の地域社会」を作り[当時の「浜町」あたりには、浅野造船によって、いわゆる十軒長屋が「100件以上」作られていた、とインタビューに答える人もいるので、大正9年あたりにはもうすでに、浅野造

船所や日本鋼管やその他の「下請」に、「人夫出」業を行い、商売としては酒屋を行う、「移動 - 住民」としての「場所形成」を行ってきた。

もちろん、「吉岡氏」の「日記」においても、また『百年の歩み』に書かれているように、朝鮮人と同じように、「差別」を受け、『百年の歩み』の26頁に書かれているように『『金銭に対する執着心が強く目の金も受けに急』とか『定着性がなく非社会的』などと下げずまれながらも、……郷里へ送金していた』（横浜・鶴見沖縄県人会編 2016：26）。

だが、沖縄出身者の「移動者」たちの特徴は、国境を越えたトランスナショナルな「場所」にも目を向けていた点であった。と言うよりは、沖縄それ自体の経済的な理由で、トランスナショナルな動きをせざるを得ない状態にあった。本書の吉岡氏が潮田に移動した昭和9年、そして、昭和10年には、日本だけではなく、「南方群島」へのトランスナショナルな移動をしていた。昭和10年には、約3万人の「移動者」がいた。これを背景にしたとき、「鶴見騒擾事件」にも、「県人の集住地区が一方の障地だったが、県人がかかわったという記録は見あたらない」という表現も、「定着性がない」という評についても、国境を超える「移動」への彼らの「条件」を仮定すれば、他の住民とは違い、「差異」的な「場所形成」を求めて、時に「出来事・闘争」に賭けつつ潮田を生きてきた、と筆者は考える。沖縄出身者の国境を超える移動者の「思想」は、差別や階層的位置を背景としながらも、「差異」の中で「自分自身を越える場所」へと誘う「構想」や「構築」を実現する「思想」であったのではなかったか。

それは、その後、1990年代に、彼らの子孫が「越境者-エスニシティ」あるいは「外国人労働者」として潮田に現れたときに、百年を超えて、地域社会の下に「埋め込まれた」「場所形成」が掘り起こされ、彼らの「日常実践」と行動を共に行動するという一つの「生き方」の「思想」が「水脈」として現在にも流れていたと思われる（広田 1997）。

3.2.3. [補足] 「煉瓦女工」「三業地」「入船カフェー」——もう一つの「カイロス」の時間

「場所形成」に、「運命」と「創造」を賭ける行動と、「越境者 - エスニシティ」と、「差異」を通して、過去の「仲通り」「沢田住宅」のように、「差異」の「場所」に自らの生きる「場所」を形成し、「闘争」の中に身を投じる「時間」を生きた人々の一種の「思想」と同様に、この「鶴見・潮田」の「活気横溢」に身をゆだねつつそうした文化の生き方もある。前出の故瀬田氏は、むしろこの潮田の「水脈」は、富沢富美子氏が描いてきた『煉瓦女工』に代表される女性の生き方にもあったと述べたことがある。実際、大正から戦前までの「活気横溢」の時代、そして戦後の鶴見・潮田「場所形成」をとおして、「活気横溢」を支えたもう一つの「思想」は、例えば「花月園」で日本で初めて「ダンス・ホール」を始めた平岡廣高の妻であった平岡静子氏や、「鶴見騒擾事件」の陰で進めた会合の場所であった鶴見の「三業地」（＝待合、料理割烹、芸妓

の三業を指す)のように「活気横溢」を支える生き方もあるが、昭和30年代まで盛んであった「本町通り」の「入舟カフェー街」や、戦前から戦後の進駐軍の「慰安所」や闇市は、秩序がゆらいだ時に、新たな「生き方」をつくる「思想」もを鶴見・潮田の「場所形成」にあった。鶴見・潮田地域には、「料理屋」「飲食店」「待合茶屋」「芸妓屋」(鶴見署に届けだされたものとしては「鶴見二業組合」)などは、例えば、戦前には43あった「カフェー」は空襲で7か所になったが(終戦後は「慰安所」として「入船私娼館」があった)(神奈川県警察史編さん委員会・下巻 1974:275-281, 350-363)。これらの「施設」の鶴見・潮田にとっての「場所形成」の役割については、現時点での本稿においては、明瞭に記すことはできないが、前述の細谷薫氏の『中町の昔と今』(非売品)の中に、「記憶」として記されている。本稿においては、それらの人々の「出来事・闘争」「運命と創造」のカイロスの時間を書くことは、本稿においては筆者の「課題」である。

4. 結語

1990年代に横浜市企画課の仕事に関連して、横浜市コミュニティ施設の調査に参加したとき、生麦の「コミュニティ・センター」で、いわゆる「外国人労働者」として、「国境を超える」日系ブラジル人の在り方に惹かれた。筆者は、いわゆる「外国人労働者」という角度からではなく、むしろ彼らの「生き方」に関心を持ち、彼らを、「越境者 - エスニシティ」と定義し、彼らの生活や「生き方」や「考えかた」に共感した住民たちを「共振者」として、彼らの関係性やネットワークの在り方について、都市社会学におけるエスニシティ論＝都市エスニシティ論と、して、彼らの国境を超える「場所」の繋がりを、「下からのトランスナショナリズム」論という研究領域として展開してきた(広田 1997; 広田 2003; 広田・藤原 2003)。

筆者は、鶴見・潮田に移動し、生活する人々の、「差異」性の中での「生き方」や、決して制度的な環境の中での「生き方」について、M.ド・セルトーの言葉を借りて、「日常実践」という言葉で表した。自らの社会とは異なる社会での生き方は、ド・セルトーが言う「数々のテクノロジーの構造の内部に宿って繁殖し、日常性の「細部」にかかわる他州の「戦術」を駆使して、その構造の働きをそれしてしまう・・・もののやりかた」そのもののような気がした(Certeau 1980=1987:18)

だが、彼らの「日系ブラジル人」たちの「生き方」や「もののやり方」には、彼らが移動してきた途端に、そうした生き方を掘り起こす「水脈」が、鶴見・潮田にはあった。そしてその背景には、確かに、「大正デモクラシー」から「ファシズム」の時代へと流れた時代の動きを背

景にしながら、しかし、本稿でのそれぞれの人々の「出来事・闘争」「階層」「サブカルチャー」を「場所形成」と「カイロスの時間」に賭ける人々がいた。確かに政治経済的、あるいは上層の政治的变化はあっても、あるいは、過去の古い因習的な繋がりや仕事上の関係や学校縁があっても、それに唯々諾々と従うだけではなくそれを利用し、そして「場所形成」と言う「自分自身を越える場所へと誘う可能性」を探し、「創造と運命とが一つになる瞬間」という「時間」あるいは、「実存的時間」を生きた「思想」を持つ人々がいた。それが、本稿で、周辺世界における「鶴見・潮田」の、「思想」としての「水脈」であると筆者は考える。

そしてその「主体」は、時代やその時々政治方向や変動に影響を受けながらも、同じ方向を向く「主体」ではなかったと思われる。ジャック・デリダが言うように、「主体を、書く者の至高な孤独のようなものとして理解するなら、そのような主体は存在しない。エクリチュールの主体とは、マジック・メモ、心的なもの、社会、世界と言った複数の層のあいだの諸処の関係からなるシステムのようなもの」(Derrida 1967=2013: 456) という考えに同意する。彼らはもつとそれぞれの「実存」に寄り添っている。故奥田道大が「移動者」やエスニシティを考えたとき、「日本人らしくない日本人」を見つけ出そうとしていた。今なら、「都市の周辺世界」の「思想」として「場所形成」と言う「自分自身を越える場所へと誘う可能性」を探すとするなら、原理的なものに自縛くするのではなく、むしろどちらかと言うと、「運命と創造を一つとする瞬間」に賭けて、自らの「生き方」を「構想」し「構築」しようとした人々の幾つもの可能性を鶴見・潮田の「水脈」として考えたい。

本稿では筆者が、「越境者 - エスニシティ」あるいは「都市エスニシティ論」や「トランスナショナル・コミュニティ」もしくは「都市の周辺世界の思想化」を鶴見・潮田の「水脈」の一端としておきたい。

[注]

- (1) 「大正デモクラシー」の問題については、大正デモクラシーの時代とファシズム、戦後民主主義との「断絶」なのか「連続」するか、と言う問題が論じられている(福家崇洋、2010、『戦間期日本の社会思想—「超国家」へのフロンティア—』人文書院)。そして戦間期をどう考えるか、と言った問題が思想史の中では重要であり、本来、本稿での「トランスナショナルリズム」や「エスニシティ」「移動」の問題ともかかわるが、本稿では論じることができない。ただ、トランスナショナルリズム論やポストコロニアル理性批判的な立場に、鶴見・潮田の「場所形成」の「思想」との関連性が関係するのではないか、と考えている。
- (2) この問題についても、本稿の「鶴見騒擾事件」の中では重要であるが、「請負業者」や「自由労働者」「土木建設業」「土工」「親分」「稼業人」「博徒」等の人々に関しては、下記の中

村元、2018、『近現代日本の都市形成と「デモクラシー」—20世紀前期/八王子市から考える—』吉田書店を参照。

- (3) この「鶴見騒擾事件」についての刊行された唯一の「正式な記録」は、神奈川県『神奈川県警察史(上巻)』の1090頁から1115頁のみと言われていた(神奈川県警察史編さん委員会(編)上巻 1979)
- (4) 筆者は、都市エスニシティ論を中心とする自著、広田康生、1977、『エスニシティと都市』有信堂; 広田康生、2003、『新版 エスニシティと都市』有信堂において、彼らを支える人々に関連する限りで、沖縄出身者の移動者の生き方について触れたが、もちろん十分な記述ではなかった。
- (5) ただし、特殊な場合の「朝鮮部落」としては、昭和20年の終戦時、鶴見の駅前に闇市が形成できた。国道を越えて潮田に入る「鶴見橋」の鶴見川の付近に戦前の「鶴声館」(料亭)が再建されたが、そこから川崎に向かったあたりの河原に「朝鮮部落」が作られていたといわれる。だが1980年代に鶴見川の護岸工事の過程で撤去され、住民は、他の場所に移された(夫 2005:20)。
- (6) ただし、「吉岡氏」は沖縄から早稲田大学に入学している。沖縄の場合優秀な若者を本土で勉強をさせ、沖縄に返すという風潮があった。

[引用文献]

Abu-Lughod, J., 1994, *From Urban Village to East Village*, Blackwell.

青山光二, 1991, 『闘いの構図』(上・下) 朝日新聞社.

朴鍾鳴, 1999, 『在日朝鮮人(第2判) 歴史・現状・展望』明石書店.

Bhabha, H K, 1994, *The Location of Culture*, Chapman & Hall Ltd (=2012, 『文化の場所—ポストコロニアリズムの位相』本橋哲也・正木恒夫・外岡尚美・坂元留美訳) 法政大学出版局.

Certeau, M. D., 1980, *ART DE PAIRE*, Union General d' Editions (=1987, 『日常実践のポイエティック』山田登世子訳) 国文社.

Derrida, J., 1960, *Ecriture et la Diferance*. Editions du Seuil=2013, 『エクリチュールと差異(新版)』会田正人・谷口博央訳, 法政大学出版局.

福家崇洋, 2010, 『戦間期日本の社会思想—「超国家」へのフロンティア—』人文書院.

中村元, 2018, 『近現代日本の都市形成と「デモクラシー」—20世紀前期/八王子市から考える—』吉田書店.

Gupta and Ferguson, 2001, *Culturur, Power, Place*, Duke University 2001.

服部一馬, 1967, 「浅野総一郎と京浜工業地帯の成立」(1)～(5), 『経済と貿易』93, 横浜市

- 立大学経済研究所』.
- 広田康生, 1997, 『エスニシティと都市』 有信堂.
- 広田康生, 2003, 『新版 エスニシティと都市』 有信堂.
- 広田康生・藤原法子, 2016, 『トランスナショナル・コミュニティ―場所形成とアイデンティティの都市社会学』 ハーベスト社.
- 広田康生, 2019, 『『都市の周辺世界』における『主体』『哲学』『過去・記憶』—エスノグラフィ的方法と『脱構築的実践』』『専修大学人文科学研究月報』 第 301 号.
- 細谷薫, 2006, 『中町の昔と今』 (非売品).
- 夫徳柱, 2005, 『現代都市の空間構造とエスニシティに関する研究—横浜市鶴見区の「リトル沖縄」を事例にして—』 (慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科, 2005 年度修士論文).
- 神奈川県警察史編さん委員会 (編), 1979, 『神奈川県警察史 (上巻)』 神奈川県警察本部.
- 北川泰三, 1989, 「沖縄県出身の同郷者集団—横浜市鶴見区の調査から—」『南島史学』 34 号 南島市学会.
- 鬼頭葉子, 2018, 『時間と空間の相克—後期テリッヒ思想再考』 ナカシヤ出版.
- 久保新一, 1984, 「ME 革命と京浜工業地帯」 横浜市立大学京浜社会研究会編『京浜社会の変貌—横浜市立大学総合研究—』 横浜市大経済研究所.
- 川崎市編, 1997, 『川崎市史 通史編 4 (下) 現代, 産業・経済』 川崎市.
- Leonard, K, 2001, “Find One’s Own Place : Asian Landscapes Re - visioned in Rural California. In Gupta and Ferguson, 2001, *Culturer, Power, Place*, Duke University 2001.
- 中田志郎, 1983, 『はだかのデラシネ』 マルジュ社.
- 奥田道大, 2004, 『都市コミュニティの磁場—越境するエスニシティと 21 世紀都市社会学—』 東京大学出版会.
- サトウ・マコト, 1999, 『鶴見騒擾事件百科』 230 クラブ新聞社.
- 斎藤美枝, 2007, 『鶴見花月園秘話—東洋一の遊園地を創った平岡廣高—』 鶴見区文化協会.
- 瀬田秀人, 1994, 『つるみ・潮田歴史散歩』 230 クラブ新聞社.
- 斎藤秀夫氏, 1989, 「資料紹介 京浜工業地帯の形成と地域社会—いわゆる『鶴見騒擾事件』をめぐって』『横浜市立大学論叢』 (第 40 巻).
- 清水昭俊, 1996, 『岩波講座 文化人類学 12 思想化される周辺世界』 岩波書店.
- テリッヒ.P, 1979, 『テリッヒ著作集 第三巻 哲学と運命』 大木英夫・清水正訳, 白水社.
- 鶴見区史編集委員会, 1982, 『区制施行五十周年記念 鶴見区史』 鶴見区.
- Ueda, R., 2002, “An Eary Transnationalism?: The Japanese American Second Generation of Hawaiian

the Interwar Years”, P. Levitt and M. C. Water eds., *The Changing Face of Home*, New York, Russell and Sage Foundation.

渡邊恵一，2011，戦間期京浜工業地帯における鉄道輸送問題—鶴見臨港鉄道の成立と展開—『経営史学』第46巻第2号。

横浜市社会課編，1935，『朝鮮人生活状態調査』横浜市。

横浜・鶴見沖縄県人会編，2016，『横浜・鶴見沖縄県人史：鶴見沖縄県人会百年の歩み』そうぶん社。

Zukin, S 2010, *Naked City*, Oxford University Press (=2013, 内田菜芳美・真野洋介訳『都市はなぜ魂を失ったのか』講談社：002)。